入選

身近なことから

東京都立富士高等学校附属中学校　一年　旭　結衣

私は五十年、百年、その先も豊かさにあふれる持続可能な「東京」にしていくために、自分も社会の一員だということを自覚し、マイバックの持参やゴミの分別など身近な取り組みを責任をもって行っていこうと思う。再生可能エネルギーの開発やプラスチックに代わって紙ストロー、木材食器の生産などに私が関わることは難しい。しかし、自分が協力できることは、数十年後の自分達、またさらに未来を生きる人々のためにやるべきだと考えるからだ。

私が小学六年生の時、マンションに引っ越しをした。そのマンションではゴミの分別にとても力を入れていた。ゴミ捨て場にゴミを出すとき、プラスチックゴミの袋、びんの袋、燃えるゴミ、燃えないゴミなど細かく分けて置かなければならないのだ。そのため、母から、そのゴミはそこに捨ててはいけないと何度も注意された。私は、その度に、これほど真剣に分別に取り組んでも大して効果がでていないのではないかと思っていた。

ある日、学校に向かう途中に、ゴミ捨て場を通りかかった。すると、分別のために何分もかけてゴミ捨て場を歩き回るおばあさんがいた。私は、そのおばあさんに

「分別に時間がかかって大変ですよね。」

と話しかけた。すると、おばあさんは

「そうだね、だけど未来の地球のために、ほんの少しでも役に立つなら苦ではないね。」と返してきた。その言葉を聞き、分別を手間がかかると嫌がっていた自分を情けなく思った。また、自分にできることだけでも協力しようと努力するおばあさんの責任ある行動にとても感心した。だから、今では私もマイバックの持ち運びやゴミの分別、水や電気を使いすぎないなど自分にできることは心がけて生活するようになった。

このような経験から、身近なことを責任をもって果たすことが持続可能な「東京」を目指すために重要だと考えた。この責任を多くの人々が果たすことで未来の東京を豊かなままに保つための大きな力になると思う。

その中で、一番の課題は多くの人に環境問題を意識させることだ。多くの人に環境問題は自分たちの生活や未来に深く関わっていること、自分たちの行動に責任をもつことでこれから先の東京を守ることができるということを伝える必要がある。そして、協力を得るためにできることは、たくさんの人にまずは今起こっている環境破壊はどんなものなのか、今後どのように進展していくと予想されているのかを知ってもらうことだと思う。だから、テレビや新聞で告知したり、もう少し規模を縮小するならポスターを町に貼ったり、放送で呼びかけたりするなどの取り組みが大切になると考える。

私たちの生活には、資源が有限であること、地球温暖化や大気汚染、海洋汚染、森林伐採など解決しなければいけない課題が多くある。そして、そんな課題を解決するためには、身近で簡単な行動に責任をもって生活することだと思った。仮に、今挙がっている環境問題をすべて解決できる技術が生まれてたとしても人々が意識をもたなくなってしまえば、いずれ今の状態に戻ってしまう。だから、私は今後、今まで以上に環境に対する意識をもち、日々の生活の取り組みを徹底していこうと考える。そして、多くの人の協力を得るために、地域での呼びかけや知り合いなどの説得から積極的に行おうと思う。

入選

私と祖祖母をつなぐＳＤＧｓ

三鷹市立第五中学校　二年　宇田川　ほの香

「さあ、今日は脱穀するよ！」

住宅に囲まれた畑に、小学生の笑い声と初めての経験に驚く表情が溢れている。この光景がいつまでも続くことを願って…。

私の祖祖母は、九十歳で亡くなる間際まで大好きな農という営みを続けていた、冬になると母屋の二階のベランダに、洗濯ばさみに挟んだ白いひらひらとした四角いものが寒風に吹かれていた。毎年の見慣れた光景だ。それは割り干し大根という。私はいつの頃からか祖祖母の手伝いをしてきた。小さい頃は、作業がただただ楽しかった。大きくなると、「なんでこんな面倒なことを続けるのだろうか」とも思った。祖祖母は、

「曲がったり傷ついたりした大根をムダにしないためだよ」

と言っていた。幼かった私はそんな言葉を気にも留めなかった。

今学校やテレビでＳＤＧｓという文字を目にしない日はない。日本の食品ロス問題、食料の多くを輸入に頼っているのに年間約五七〇万トンも捨てられている現実。ヒートアイランド現象、都会の熱風が周りの県にまで熱波を送り込んでいる。アスファルトが土をおおい、密集して建物で熱がこもり、東京はまるで魔法瓶のようだ。大雨の時は、行き場のない水が一気に排水溝や川に流れ込み溢れてしまう。雨水が地下に染み込むアスファルトがあればいいのに。首都直下型地震もいつ起きてもおかしくないという。こんなに住宅が密集していて、そこら中で火災が発生したら次々に燃え移って消火も追いつかないのではないか。このようなことは東京にとって大きな問題ではないか、ふと畑仕事をしていた祖祖母の姿を思い出した。「ああそうか、大ばあちゃんはずっと昔からＳＤＧｓを続けてきたのかな。」祖祖母は農の営みを続けることで、私に教えてくれたのかもしれない。

東京で農業を続けるのは難しいようだ、私の家の畑も、十数年で半分になってしまった。それでも、祖祖母から祖父母へ、そしていま父へとバトンは繋がっている。うちの畑には時々小学生が大勢やってきて、野菜の種まきから収穫、もち米の収穫やもちつきまで農業体験をしてもらっている。小学生からもらったお礼の手紙は祖父の宝のようだ。子供たちの喜ぶ顔が祖父にとって大きな原動力となっている。

私の家のご近所の方々は「畑を残してね。がんばってね。」と応援してくれている。土ぼこりが飛んだり機械の音がするだろうに、それでも植物が育っていく空間の価値を理解してくれているのだ。

私と家族にできるＳＤＧｓ。それは農という営みを続けていくことだ。それは東京という大都市にとって小さな小さなことかもしれない。それでも、昔私にたくさんのことを学ばせてくれてたくさんの愛情をくれた祖祖母の思いを繋ぎ、この場所で生き続けたい。

入選

私にできることから

国分寺市立第五中学校　三年　大林　伶央奈

「あれ、何かいつもより暗いね。でも目に優しくていいね。」

母と夜、近くのスーパーに買い物に行ったときのこと、食品売り場の明かりがいつもより暗くなっていることに気付き、思わず出た言葉だ。スーパーが省エネに取り組んでいたのである。

真夏日に節電のためにエアコンを使わないことは命の危険があるのでよくないが、スーパーや商業施設などの明かりを少し暗くするなどの節電の工夫はとても共感できた。

現在、世界は「地球温暖化」が深刻で、一刻を争う問題になっている。もしこのまま地球の気温が上がり続けたら私達の生活はどう変わってしまうだろうか。氷河が溶け、海面が上昇し、低い土地や小さな島が海に沈んでしまったり、氷が溶けて海が広がることで雲のできる仕組みや風の吹き方などが変わり、大雨や洪水、台風が増えたりする。反対に、雨や雪が少なくなる場所や砂漠は増える。このような気候変動で、田畑では農作物が取れなくなり、動物が生きていけなくなることで、肉や魚が少なくなる。そうなれば私達の食べ物がなくなってしまう。すでに氷上生活をしているホッキョクグマの住む場所やエサが減るなどの影響は出始めている。他にも、アフリカなどの熱い地域で発生していたマラリアなどの伝染病にかかる人が増える心配も出てくる。

それでは、なぜこのような事態が起こったのだろう。

それは、電気やガス、ガソリンを作ったり、機械や乗り物を動かしたりするためには、石油や石炭、天然ガスなどを大量に燃やす必要があるからだ。資源を燃やすと二酸化炭素などの「温室効果ガス」が発生する。これが地球温暖化の進む原因の一つである。すなわち、人間に大きな影響があると予測されている地球温暖化の一因を作ったのは、私達「人間」であり、経済の発展と便利な生活を優先してきた代償とも言える。

私の住む大都市東京でも、様々な地球温暖化への取り組みがなされている。東京湾の埋め立て地に「東京風ぐるま」という、二基の風車を建設したり、都議会議事堂の屋上に太陽光発電を設置したり、水素を使って走る、「燃料電池バス」の走行実験を行うなど、再生可能エネルギーの推進を積極的に行っている。

そんな中で、私個人にもできる取り組みは何かと考えたとき、日々の生活の中で個々の気持ち一つでできることが、省エネではないかと思った。

私は中学校で生活委員長をしており、今夏、エアコンの使い方についてのお便りを発行した。真夏日に、教室を短時間だけ空ける場合、エアコンは切らない方が省エネになることを学び、その理由を含めた内容のものだ。

私一人だけではなく、全校生徒で省エネに取り組むことが大切だと思う。こうした小さなことの積み重ねが、いずれ大きな成果につながると思う。このような取り組みは、全員が取り組まなくてはあまり意味がないので、協力して今後も取り組んでいきたい。

最後に、地球温暖化への取り組みは、地球を「守る」ということにつながる。そのため、世界全体で足並みをそろえて取り組むべき課題であるが、その第一歩として、私達一人一人ができることから始めていくことが大切だと改めて感じた。

このような取り組みを続けていくことで、自然は豊かになり、「持続可能な東京」になると思う。そして、国内で最も多くの電力を消費していて、日本の顔である東京が手本となり、対策を講じて実行し、国内外に発信していくことがとても重要なことだと思う。

入選

「未来の東京をゴミから守る」

お茶の水女子大学附属中学校　三年　岡本　彩弥子

夏休み、家の前にゴミ出しをしに行ったら祖父母の家のゴミの量がとても少ないことに驚いた。それぞれの家の前に置かれているゴミの量を目にすると、やはり家庭によってとても差がある。もちろん生活している人数によってゴミの量が違うのは当然だがそれでも祖父母の家のゴミの量は少ないと感じた。疑問に思って祖父母に聞いてみたら生ゴミは庭の生ゴミ処理機に廃棄しているからだと分かった。そういえば私が子供の頃、庭に虫がたかっていたことに驚き、何があるのかと近寄ってみたらゴミ箱のようなものが土に埋まっていた。変だなと思いながらも意味を考えなかったが、そこには生ゴミを入れていたからだと分かり納得した。生ゴミ処理機に生ゴミを入れておくとその後肥料となり作物を育てるのに使えるらしい。そのようなことでもゴミを減らせると分かり、私自身のゴミを処分するときの行動を振り返ってみた。

ジュースを飲んでペットボトルを捨てるとき私はいつも捨て方について母に注意されてしまう。飲んだ後の状態のままゴミ箱にそのまま捨てたいが、ペットボトルを捨てるまでの作業はとても長いのだ。まずはパッケージをはずして汚れてないプラスチック専用のゴミ箱に捨てる。次にキャップを外して洗い、キャップを集めている袋に入れる。最後にペットボトル本体を洗って乾かす。ジュースを飲むのは美味しいが捨てる作業は正直とても面倒くさい。どうしてこんなことをわざわざやらなくてはいけないのだろうかと思うが、それらのゴミは全て資源となるそうだ。きれいなプラスチックは区の資源回収に出す。ペットボトルはスーパーの回収ボックスに入れる。そしてペットボトルキャップは小学校で集められ、業者に買い取られた後、発展途上国の子供へのワクチン普及の寄付金となる。ジュースのゴミがこのような資源になると分かり、面倒でも分別する大切さを感じた。

身近なところでもこのようにゴミを減らす活動をしているけれど、実際東京都全体のゴミの排出量はどのくらいなのか気になり調べてみた。環境省の調査によると、意外にも東京都の一人当たりのゴミの排出量平均は全国平均以下だ。しかし、東京二十三区は足を引っ張っている。平均以下の要因は、多摩地域の取り組みのおかげだ。多摩地域ではどんな活動をしているか、私たちに活かせることはないかさらに詳しく調べた。多摩地域ではゴミ袋の有料化、ゴミ削減の必要性を呼びかける講演会、食品ロス削減のための店への協力要請など様々な啓発活動をしていたが、特に難しい取り組みはしていなかった。それでもゴミの排出が少ないということは、それだけ住民一人一人のゴミ削減への意識が高いということだ。

近年、東京では大量のゴミ処分により埋め立て地の減少が課題となっている。だからこそ多摩地域のように一人一人ゴミに対する行動を起こす必要があると思う。例えば地域ごとにゴミの減り具合を競い、削減幅が大きかったところの地域へ利益を還元するイベントだ。多くの人が興味をもって、ゴミ削減へ協力することができれば、ゴミ問題解決に大きくつながるはずだと思った。他にもゴミについての教育を子供達にすれば良いと思う。小さい頃からゴミを減らす行動を身に付けておけば習慣となって自然と意識が変わるのではないだろうか。私もジュースを捨てるのが面倒だと感じていたが、小さな行動がゴミ削減につながることが分かったので、これからも習慣化していこうと思う。

未来の東京の環境を守るために、自分にもできることを少しずつ増やしていきたい。

入選

お手本

東京都立富士高等学校附属中学校　二年　笠井　千尋

日本の首都、東京。首都は政治・経済の中心であり、その国の手本となるべき場所だ。しかし、東京が持続可能な未来を目指す取り組みの手本になっているとは思えない。私達は何をすべきなのだろうか。

地球温暖化が進む中、今世界中で注目を集めているのがSDGsだ。これは世界の様々な問題を整理し、解決に向けて具体的な目標を示したものである。二〇一五年に国連で採択され、二〇三〇年までに達成しようということになっている。近年、SDGsに対する意識が高まってきているようだ。二〇二一年十二月の朝日新聞社による認知度調査では、七十六パーセントが「SDGsという言葉を知っている」と回答した。二〇二〇年十二月の四十五パーセントから大幅に知名度が上がったことが分かる。

私もSDGsを知ったのは数年前で、それまでは環境問題についてあまり意識していなかった。知るきっかけとなったのは、学校の授業だ。インターネットでSDGsについて調べて、地球の深刻な現状を初めて知った。家に帰って祖母に環境の変化について尋ねると、昔の夏は今より涼しかったと教えてくれた。人間の活動がこれほどまでの悪影響をもたらしてしまうことに、小学生だった私は大きな衝撃を受けた。

それから私は環境問題に興味をもち、よく調べるようになった。だが、問題の解決に向けた具体的な対策を実行できていなかった。日本は関係ないだろうと勝手に思っていたのだ。私は世界の現状を知っていたのに、行動できなかった。

それから少し経った頃、テレビなどでSDGsが頻繁に紹介されるようになった。その影響もあってか、世間が少しずつ資源の再利用を意識するようになった。そしてまた、学校でSDGsの授業があり、その中である動画を見た。それは、地球が抱える由々しき事態を映した動画だった。この動画を見て、事態が思っているより深刻なものであると気付かされた。私は自分にもできることがないかと考えた。そんな時、スーパーで見かけた三歳くらいの女の子とそのお母さんのある行動が目に留まった。二人は、牛乳パックをリサイクルボックスに入れたり、紙パッケージのお菓子を選んだりと、地球に優しい行動をしていたのだ。私は何も気にせず買い物をして、当然のようにビニール袋を貰うという自分の行動を反省した。二人がどれだけ地球のために頑張っても、私がそれを台無しにしてしまっていると気が付いたからだ。

また、二人の会話を聞いているとSDGsの存在を知ったばかりのようだった。お母さんが女の子に教えたのだろう。私はそのお母さんの行動が素晴らしいと思った。もしかしたら小さな子供はSDGsについて説明されても理解できないかもしれない。それでも、小さい頃から地球のためにできることを覚えさせて未来に繋がる行動をしていたからだ。SDGsは行動するだけではなく、広めて皆で取り組むことが大事だと感じた。

持続可能で豊かな東京をつくるために、私にできることは三つあると考えた。一つ目は知ること。慈善団体や企業の取り組み、身の回りの物の再利用方法などはいつか絶対に役に立つだろう。二つ目は実践すること。せっかく知識をもっていてもそれを活用できなければ意味はない。無駄な物は買わない、再利用できないか考えるなどささいなことだが私にもできるはずだ。最後は広めること。自分だけできていても地球規模の課題を解決することはできない。周りの人の協力が必要不可欠だ。

あの親子のおかげで私は行動することの大切さを知り、ほんの少しだが持続可能な未来が近づいたような気がする。私も誰かにとってそんな存在になれるように努力したい。世界の手本となる東京を目指して。

入選

ゲリラ豪雨のあと

筑波大学附属中学校　一年　小林　廉太朗

朝起きて、カーテンを開けると青い空。今日も晴れだな。今日も暑くなるのかなと思いながら出掛ける仕度をした。

バス停でバスを待っていると、大粒の雨がぽつんと降ってきた。「え、雨？」と思ったときにはもう雨が降りはじめ、屋根のないバス停にいた人たちは、みんな慌てはじめた。折りたたみ傘を出す人やあわてて移動する人…。ぼくは折りたたみ傘を持っていないのでどうしようかと思っているそばから滝のような雨になった。すでにずぶぬれになっていたぼくは家に引き返すしかなかった。

これが「ゲリラ豪雨」か…と思った。ゲリラ豪雨とは突発的で、正確な予測の難しい局地的な大雨のことだ。

夏の暑さも年々厳しくなっている気がするし、こうしたゲリラ豪雨や熱中症のニュースを何度見たことか。異常気象という言葉は知っていたが、身をもって体感した気がした。こうした異常気象の原因となっているのが、地球温暖化。地球温暖化の原因になっている内の一つが二酸化炭素だ。地球は温室効果ガスに包まれていて、そのおかげで過ごしやすい気温が保たれてきていた。しかし近年は、人類の活動によって温室効果ガスの層が厚くなり、多くの熱が地球上にこもるようになってしまった。この温室効果ガスを厚くしているのが二酸化炭素なのだ。

ぼくはゲリラ豪雨にあったことが、少し悔しかった。自然は予測できないものだから仕方ないと思う人もいるかもしれない。ぼくはずぶぬれになっただけだが、こうした豪雨で農作物がダメになったり、土砂崩れが起きたり、大きな被害を受けたりする人たちもいる。気温の上昇も、ぼくはクーラーで涼しい部屋にいることができるが動植物は生きる環境を失って絶滅してしまうかもしれない。どうにかしたいと思った。

けれども、二酸化炭素を減らすのは工場や自動車のイメージでぼくができることはあるのだろうか？

調べてみると、ぼくが暮らしている東京都では二酸化炭素の排出量が多いのはお店やオフィスについで家庭だった。東京はオフィスビルなどが集中しているのでそこからの排出量が多いのだ。東京都はすでに事業所などへの取り組みをいろいろと行っており、二酸化炭素排出量の削減を達成してきていることを知った。最高水準の省エネ対策がなされているトップレベル事業所が多くあることを知り、企業と行政が連携してこうした環境問題に取り組んでいる東京を誇らしく思った。

家庭でのエネルギー消費量が大きいのはエアコン。これはいつも二十八度に設定しているし電気やテレビなどの付けっぱなしはしないように常に心がけている。今年は緑のカーテンを作ろうと妹と朝顔を育てた。また、母とこの事について話し、二酸化炭素排出量を減らすために地産地消を心がけようと決めた。スーパーでも地元のものを売っているコーナーをまず見に行く。ぼくが家庭で取り組んでいることは小さなことでしかないが、持続可能な未来のよりよい東京を目指している気持ちは大きい。今回調べてみて、二酸化炭素を出さない車やバイクを作っている企業や、クリーンなエネルギーを研究したり、導入に取り組んでいたりする企業が沢山あることを知った。ぼくも将来、こうした様々な問題に取り組み持続可能な未来を作っていける仕事がしたいと思った。夏休み、だらだらせずに勉強をしなくては、と気を引き締めた。ゲリラ豪雨のあと、未来の東京を考え、自分の未来も見えた気がする。

入選

「もったいない」をポケットに

東京大学教育学部附属中等教育学校　二年　小柳　亜美

外出時に忘れたら困るものと言えばお財布、携帯電話ではないでしょうか。私はそこに「もったいない」精神を付け加えようと思う。

「持続可能な未来の東京」を創っていくには、豊かな未来の東京を想像し、一人一人ができることを模索していく必要がある。様々な課題がある中で、私は特に食品ロス問題について関心がある。それは、幼いころ「命をいただく」という絵本を読んでもらったときから、私は食事をなるべく残したくない気持ちがあり、そして何より美味しいものを食べることが大好きだからである。日本での食品ロスの量は年間約五百二十二万トン、国民一人当たり年間約四十一キロと言われていて、多くの食品が廃棄されている。東京都の食品ロスの量は約五十七万トン、そのうち四割が家庭から出た食品ロスというデータを見て私は驚いた。一方では、貧困で苦しんでいる子供が七人に一人いる。以前テレビで子ども食堂やフードバンクについて見たことがあった。フードバンクは貧困世帯への支援と「食品ロス」を減らす、両方の役割が期待されている。それから自分の地域ではどのような活動をしているのか意識して目を向けてみた。中野区には二十八カ所の子ども食堂があり、連携することで多くのメリットが生まれることを改めて認識した。

小学生の頃給食の食べ残しを減らそうという取り組みを行った。毎月食べ残こし量を把握し、生徒全員がそれぞれ自分の食べられる量を配膳してもらい、また積極的にお代わりをできる子がする。その事により学校全体の年間残量は減り、給食を作ってくれている方々の笑顔が印象に残っている。これは生徒一人一人が問題解決に向け意識し、協力して食べ残しを減らそうという目的に向け、努力したことの一例だと思う。

その一方で、食品の廃棄問題はなくならない。私はここで「もったいない」精神こそ、持続可能な未来の東京に欠かせないと考える。高齢化社会に突入した今、家庭や地域でのいろいろな取り組みが何事においても大切だと思う。私の両親、祖父母たちは共に東京生まれで親せき一同が近くに住んでいる。よく祖父母や親せきの家に多く作ったおかずを持って行ったり、持って来たりして行き来しているが、このようなやり取りをしたくてもできない環境の人は多いと思う。各家庭やレストランで余った料理や使わなかった食材を保管できる「連帯冷蔵庫」というスペインモデルも大阪や岡山では見られるが、人口が多い東京こそ取り入れてみて欲しい。そこに集まった材料で作った物を必要な人がいつでも食べることができるレストランや、「もったいない」を活用する方法を知る機会の場をさらに増やし、区市町村で協力し合い、食品ロス解決へ向け、今まで以上に一丸となることで、その先の未来に続く優しい東京が想像できる。いくつもの課題はあるが、多くの人の知恵と未来の東京を想う気持ちがあればできないことはないと思う。

最も重要なことは一人一人が環境問題を意識することだと思う。私は家でも外でもなるべく残さないようにしているが、外食で食べきれないときは持ち帰り用の容器をもらって帰ったこともある。食べられる量や賞味期限を意識する努力をしている。世界に誇れる日本の「もったいない」精神をより一層意識し、世界に誇れる東京を繋げていかなければならないと強く感じた。

夏休み中にお母さんと普段は捨ててしまいがちな野菜の皮を使ったスープを作ったところ、食卓が野菜の話で盛り上がった。今までもったいないことを沢山してきたと思うくらいおいしかった。「もったいない」精神が外出時に忘れては困る一つになる日を信じて自分達のできる小さな取り組みを一つずつ増していきたい。

入選

住み続けられる東京を目指して

世田谷区立砧中学校　二年　田村　梨佳

夏休みに岐阜県大垣市にある伯父の家に親族が集まった。そこで盛り上がった話題の一つがごみ問題だ。発端は大垣市では来年からごみ袋が有料になるという話。燃えるごみと燃えないごみに関しては、それぞれ一枚あたり五十円の有料指定ごみ袋に入れて出すというルールに変更になるとのこと。私の住む世田谷区では中身の見える透明か半透明のごみ袋を使用していれば回収してくれる。ごみが多いときは複数の袋に分けて出すし、ごみの量を気にしたことはほとんどない。普通のごみを出すのにお金がかかるのなら、毎回一袋にまとめる努力をしなければいけないな、とぼんやり考えた。会話に参加した叔母やいとこたちは関西のそれぞれ違う市に住んでおり、みんなの話を聞いていると各自治体によってごみの分別ルールや出し方などが違っていることがわかった。

気になったのでごみ問題について調べてみた。ごみ袋を有料化している自治体は全国にある。ちなみに北海道登別市では、ごみ袋有料化によりごみの排出量が三十六％削減できたらしい。ではなぜごみの削減に取り組まなければいけないのか。ごみが増えることによって、処理費用が増え、最終処分場がひっ迫し、環境問題にもつながるという。

環境問題といえば、社会の授業でも出てきた持続可能な開発目標、いわゆるＳＤＧｓ。この中に「住み続けられるまちづくりを」という目標が掲げられている。私たちが暮らす東京を未来も豊かさにあふれる持続可能な都市にしていくためには何に気を付けるべきなのか。

首都、東京には様々な課題がある。過密、サービス提供のための資金欠如、適切な住宅の不足、インフラの劣化、都市内部の大気汚染の悪化等々。そして廃棄物の安全な除去と管理という課題もある。ごみ問題に取り組むことも「住み続けられるまちづくり」につながるのである。

ごみの細かな分類や分別、出し方のルールは各市町村によって違い、東京都の中でも異なっている。家庭ごみの処理方法については各市町村が区分を定めるよう法律で決まっており、自治体によって処分場の有無や焼却設備の処理能力、ごみの総量、処理するための財源が異なっているために地域差が生まれるようだ。

ごみを減らすために、各自治体で様々な取り組みをしている。ごみ分別アプリでごみ出しに迷わない工夫をしたり、分別を動画で案内しユーチューブで見られる工夫をしたり、ごみダイエットのキャラクターを作り、啓発活動に役立てたり、といった努力である。

では私たち個人としてできることはどんなことがあるだろうか。まずはよく言われている３Ｒ、リデュース（減らす）、リユース（繰り返し使う）、リサイクル（再生利用する）の実践である。たまに気を付ける、というレベルではなく、普段の歯磨きのように習慣化しやらなければ気持ち悪いというレベルまで意識を持っていく必要がある。また３Ｒに加えて、リフューズ（断る）ということも必要である。買い物をするときにレジ袋やお箸やスプーン、過剰包装を断るという行動はごみ削減につながる。また、色々調べる中でごみの水分を減らすことで焼却時のエネルギー削減につながることも知った。生ごみをそのままごみ袋に入れ、水分が含まれるものは乾燥させてからごみに出す、ということを徹底することはすぐに始められそうだ。

ごみの減量化に私たち一人一人が取り組むことで持続可能な都市にしていく一歩になることを信じて、今日も私はペットボトルではなくマイボトルを片手に出掛けよう。

入選

「私の選択は未来への投票」

中央区立晴海中学校　三年　秩父　こなつ

二〇五〇年、プラスチックごみの量が海の魚の量を超える。そんな話を聞いたことがあるでしょうか。確かに、海にごみが浮かんでいる様子や、浜辺にごみが流れつきあふれている様子は、誰もが一度は目にしたことがあるのではないでしょうか。私はこの話を知り、衝撃を受け、プラスチックごみが及ぼす影響は想像をはるかに超えていると気付かされました。このままでは海で泳ぐことも、釣りをすることも、お寿司を食べることもできなくなるかもしれません。さて、これからの未来はどうなっていくのでしょうか。

最近よく耳にするＳＤＧｓ。十七の目標の十四番目に、「海の豊かさを守ろう」というものがあります。目標達成のための取り組みで、私が注目したいのはストローです。ストローは、プラスチック製が一般的であることや、海の生物にケガさせてしまうという課題があります。そこで、世界ではストロー削減の取り組みが多く行われていて、企業の活動も見られます。その中でも特に私が驚いたのは、ウォルト・ディズニー・カンパニーの取り組みです。私がディズニーランドに行ったとき、飲み物のふたの形状が変わっていることに気付きました。ストローをささずにそのまま飲めるようになっていたのです。後日調べたとき、ディズニー全てのテーマパーク・リゾートでのストロー廃止により、年間一億七千五百万本の削減ができることを知り、さらに驚かされました。また、スターバックスコーヒーでは、緑のプラスチック製のストローから木製のストローに切り替えられました。このような木製のストローやステンレス製のストローの開発も進んでいます。

では、私ができることは何でしょうか。私は、学校から環境を守ることを考えています。私の通う学校では、毎日放課後に掃除をしています。しかし、毎回沢山のごみが集まり、そのほとんどが消しゴムのカスや、紙のはしきれなどです。生徒は無意識のうちにごみをその場に落としてしまっているということです。そして、海にあるごみは人々が捨てたもの、すなわち、ポイ捨てしたごみということです。つまり、私たちはごみをごみ箱に捨てるという基本的習慣が必要です。そこで、委員会でそのようなキャンペーンの実施や、環境問題に対しての多くの企業の取り組みの紹介などを通じて、環境問題について真剣に考えることで生徒から多くの人に伝染すると思います。

また、世界の技術は今、驚くほど進歩しています。特に、東京には多くの企業・人が集まっています。それらの技術によってストローのみならず、環境に優しい製品がどんどん作られているでしょう。しかし、それらは私たちが利用することで初めて製品としての価値が生まれます。私たちはそれらの製品を積極的に利用することで環境問題に貢献することができます。

ストローは木製を使うか、プラスチック製を使うか。ごみはポイ捨てをするのか、ごみ箱に捨てるのか。その選択は未来への投票と同じであり、未来を変えられるのは私たちしかいません。自分たちの未来を守るため、様々な生物との共生をするために一人一人が環境問題と向き合い、行動を起こしたとき、きっと明日の東京は輝いているでしょう。

入選

未来のリーダーとして

世田谷区立世田谷中学校　二年　長　美桔

六月下旬、東京で六日連続猛暑日を記録した。これは、観測開始以来初の出来事だ。一九八五年のフィラハ会議で地球温暖化が話題となって以来、長年問題となっている。特に、近年温暖化が加速している。環境省は、この暑さがこのまま続くと、二一〇〇年の夏に東京は四十四度を記録すると発表した。このような気候変動を抑え、東京を持続可能な都市にするために、私達は何ができるのだろうか。

地球温暖化は石油などの化石燃料の使用や森林の減少などによって、地球から宇宙へ逃げる熱を調節する温室効果ガスが増えすぎて、熱をうまく調節できなくなることで起こる。つまり、化石燃料の使用や森林の減少などが抑えられれば、地球温暖化の進行は遅くなる。そのためにに私達ができることの一つに「ごみを減らすこと」が挙げられる。ごみの焼却によって発生する二酸化炭素は温室効果ガスの一つだからだ。人間が生きていれば必ずごみは出る。これは避けられない。だからこそ、この問題を上手く解決することで大きな成果が得られると思う。先程も触れたとおり、ごみを減らすことによって、ごみの焼却で排出される二酸化炭素が抑えられる。また、ごみの減少により、ごみ収集車の台数も減るから、車の排気ガスも抑えられる。それに、埋立地が不足したら森林を切り拓いて新しい埋立地を準備しなければならないが、ごみが減れば埋立地を増やす必要がなくなるから、森林の減少も抑えられて、一石二鳥だと思う。

ごみ問題について考えるために、身の回りの物をよく観察すると、ごみを減らすための取組みが沢山あることに気が付いた。例えば、紙パックジュースの工夫である。そのジュースを飲み終わった後にパックを畳むと、容器の隠れた場所から「たたんでくれてありがとう」というメッセージが現れる。一言のメッセージだが、思わず「次も畳もう」という気になるから、私もよく畳むようにしている。

他にも自治体としての取組みにも気付いた。神戸市の祖父母の家に行ったときに、神戸市指定ごみ袋という東京にはない物があったのだ。袋には、『ワケトン』という神戸市オリジナルのミニブタのキャラクターが描かれていた。このキャラクターは、若い世代にもごみ問題に興味をもってもらうために作成したという。ごみの種類に応じて、専用袋が作られ、袋には一枚ずつ使用方法も印字されている。指定ごみ袋は普通のごみ袋よりも値段が高いというデメリットもあるが、袋が高いからこそ、ごみを減らして袋の使用を節約しようという思いになるメリットの方が大きく、効果的なのではないかと思った。神戸市の工夫はそれだけではない。『ワケトンブック』という、ごみの出し方や分別方法がしっかりと説明された冊子も用意されている。キャラクターが描かれている方が親しみやすいし、袋本体でもガイドブックでも丁寧に分別方法を説明することで、分別方法が広く深く伝えられるのが良いなと思った。

この二つの例は、どちらも「困難な課題を少しでも楽しみながら解決に近づけるちょっとした工夫」だ。環境問題はどう取り組んでいいかが分かりにくい問題だが、私達こそが未来のリーダーとして責任をもって取り組むべき問題だと思う。私達が少しでも興味深く、楽しみながら取り組むことができれば、だんだんそれが習慣に、そして当たり前にできるようになり、少しずつでも環境問題が解決に向かっていく。だから、私は日頃から無理なくできる楽しい工夫を続けることが大切だと思う。また、環境問題が自分事として捉えにくい印象があるのは、自分達の行動が地球にどう影響するかイメージしにくいからだと思う。影響をイメージすることは難しくても、私達の未来をイメージすることはできる。私達が大人になっても暮らしていける持続可能な東京、地球。私達の小さな行動が持続可能な未来、私達の明るい将来に直結している。

入選

未来につなげる今の取り組み

東京大学教育学部附属中等教育学校　二年　二之宮　朔実

今、世の中には様々な環境問題がある。例えば、地球温暖化問題や森林伐採、大気、海洋、水質汚染などが挙げられる。そして、ごみ問題も環境問題のうちの一つである。ごみ問題とは、分かりやすくいうと、ごみが増えすぎたことによる社会問題である。これが環境問題といわれている理由は、いくつかある。

一つは、焼却炉でごみを燃やした際に出る二酸化炭素やダイオキシンのことである。二酸化炭素は地球に温室効果をもたらし、それが地球温暖化を促進している。ダイオキシンは環境中では分解されにくいため、大気、土壌、水質等の環境を汚染している。二つ目は、ごみの最終処分場の残りがわずか二十年分ほどになってきていることである。ごみを捨てる場所がなくなれば、日本中がごみであふれてしまうかもしれない。しかし、新しく埋め立て地を作って最終処分場にした場合、有害物質が海に流れ出てしまっては、海洋汚染の原因になってしまうだろう。

これらのことが悪化、進行しないためにも私たちにはできることがたくさんある。それらは、３Ｒの実施や食品ロスを減らすことである。廃棄物の中でも、まだ食べられるのに廃棄されてしまう食品、つまり食品ロスは消費者庁による二〇二〇年の推計量では五二二万トンと発表されている。私自身も無駄なものを買わないことや、詰め替えボトルの購入などはできていると思う。また、レジ袋が有料化されたことによって、多くの人がマイバッグを持ち歩くようになっただろう。しかし、食品ロスについては多くの人が解決策を明確に知らないのではないだろうか。そのため、私は、持続可能な豊かな都市「東京」をつくっていくために自分ができることとして、フードドライブという活動を挙げる。フードドライブとは余った食べ物を寄付する活動である。この取り組みは、自治体やＮＰＯ法人、スーパーなど様々な場所で実施されている。食品の条件や求めている食品は自治体ごとに違う。私の住んでいる地域で行われているフードドライブでは、条件として未開封のもの、賞味期限が二ケ月以上あるもの、常温保存ができるものが挙げられている。私の家では、以前きな粉の賞味期限が過ぎてしまい、廃棄したことがある。原因は多く買ったことによってすべてのきな粉を使い切れなかったからだ。この時の対策として、多く買いすぎないことが一番に挙げられるが、フードドライブという活動をもっと詳しく知っていればよかったと思う。そのため、次の機会からは、積極的にフードドライブの活動に参加したい。また、私の地域のフードドライブの求めている食品の中に、粉ミルクや離乳食がある。これらの食品は赤ちゃんや幼児が主に食べるので、成長してしまい、家に食品が残ってしまっている家庭も多くあるのではないだろうか。これらの人々にフードドライブへの協力を得るために、私は次のことを提案する。それは、ポスター又はプリントなどを作成し、校内や町の掲示板などに貼ったり、配ったりすることだ。私も妹がもらってきたプリントによってこのフードドライブという活動があることを知った。そのため、家に食品が残っている人からすれば、この活動は印象に残るものになり、協力を得られるものになるのではないかと思う。また、私自身が週番のスピーチなどでフードドライブについて紹介していく。そして、区や市の施設で様々な取り組みを行っていることを知ってもらえれば、たくさんの人がフードドライブに触れることができ、多くの人の理解を得ることができると考える。

私はこれらの活動により、持続可能な豊かな都市「東京」をつくることができればいいと思う。また、私の学校の特色である、グループ発表など、様々なことを通してより多くの人に知ってもらえればいいと思う。そして、自分自身の生活も見直し、環境にやさしい生活を送りたい。

入選

未来の創り手

日野市立日野第二中学校　二年　萩原　快吏

私たち人間は今、危機的な環境問題に直面しています。「脱炭素」や「脱プラスチック」などの目標を掲げ、世界で進むＥＶシフト、海洋プラスチックゴミの再生やレジ袋の有料化をするなど、国や企業、団体であらゆる取り組みが始まっています。私は、世界的に問題視され、山積する環境問題に興味をもち、これらの取り組みを踏まえながら、今、私にできることを見つけたいと思い、あるプロジェクトに参加しました。その活動がきっかけで、自分の世界を翻す様々な事実に直面することになります。

このプロジェクトは「ＳＤＧｓ」をテーマに、東日本大震災の被害を受けた宮城県を訪問し、二〇三〇年の未来を考えるという活動です。

緑深い山々と果てしなく青い、美しい海に囲まれた自然に富んだ宮城県。初めて宮城県を訪れたときにはこう感じました。しかし、実際は違うようです。森林は間伐するのもままならず、地域によっては植林したまま放置されていることもあるようで、建築用材として使い物にならない細々とした木が多いようです。また、木々が密集し、日光が充分に行き届かない山は豊かな山には成り得ません。「森は海の恋人」と言われますが、山の養分が海に充分に流れ出ていない地域が多いというのが実際の宮城県の自然環境の姿だそうです。

震災発生当時、電気も油も分断され、食料の確保やガソリンの供給もできなくなり、人々は不自由な生活を強いられました。この教訓を生かし、某会社が設立されました。その背景には、地産地消のエネルギーを創り、持続可能な社会を実現したいという思いがありました。この会社では、前述のように荒れた山を豊かな山にするべく森林の手入れなどを行い、その過程で不要となった間伐材をエネルギーに変換しているそうです。

このような取り組みにより、生産物がめぐり、エネルギーがまわり、森の栄養分が海にめぐるという地域内循環を実現していることが分かりました。そして、何においても地域内で生産し地域内で消費するという考え方が、環境に優しく、活気のある街を形成する後ろ盾になっていると感じました。

また、宮城県の某中学校を訪問し、二〇三〇年の未来の在り方について考えました。

私の住む地域では、環境保全の取り組みに力を入れており、自然環境の維持に努めています。しかし、これから先、人口が増えると想定したら、広大な土地を要します。するとますます自然は喪失され、そこに生きる動植物も同時に失われます。私の中には自然環境の維持と人間の生活を両立できるかという懸念があります。これについて、某中学校の生徒もまた、人々が利便性を追求するあまり、ショッピングモールや高速道路などが建設されると豊かな自然環境という本来の良さが失われてしまわないかと危機感を覚えていました。

私たちは、自然環境の維持と人々の生活を両立する社会という目標を共通の認識とし、実現しようと考えました。

そのために私たち中学生が今できること、私は啓発活動を行いたいと考えています。宮城県を訪れ、見て、聞いて、感じたこと、学んだことを東京へ持ち帰る。そして、身近な人から始め、多くの人へ発信することが私の使命だと思います。植林をするにも再生可能エネルギーへ取り組むにも、様々な人の協力が不可欠です。ですから、まずは環境問題に対して更なる危機感をもってほしいと思います。

私たちが未来の創り手として多大な課題に直面する今、本作文や題材としたプロジェクト活動などの機会を通し、多くの人に被災地の現状を風化させないように伝えていくことが、持続可能な都市「東京」を築き上げると信じています。

入選

五十センチからはじめよう。

世田谷区立砧中学校　二年　宮本　瑠子

その人のことを、私達は「あしながおじさん」とよんでいた。背中に「ひと声かけてまちづくり」と書かれた黄色いジャンパーを着て、毎朝小学校の正門に立っている。

「おはようございます。」はじめて私が挨拶を交わしたのは入学式の朝だった。元気が取り柄の私は小五まで皆勤。親戚の結婚式で一日だけ休んだ翌日、友達に尋ねた。「昨日あしながおじさんいた？よね。」「いたよ。」「朝の挨拶運動、皆勤賞だね。」「挨拶だけじゃなくて掃除も、だからすごいよね。」「掃除⁉」その小学校は、市立中学校と隣接していて、小学校の正門からまっすぐに伸びた道路百メートル先が中学校の東門というロケーションだ。毎朝たくさんの小中学生が行き交う。あしながおじさんは二つの学校の周辺を挨拶運動の前に掃除していること、早朝できる長い影が呼び名の由来であることを知った。その姿を見ていた中学校の校長先生も一緒に掃除するようになって七年になるという。そういえば、年間予定表に『ＳＤＧｓに取り組もう。地域清掃の日』というのが十一月にある。小中学生と地域ボランティアの数十名で地域清掃をする日だ。地域代表はもちろん、あしながおじさんだ。東京郊外で静かな住宅街だが、かつて夜、学校周辺でたむろする人達がいて朝にはペットボトルやお菓子のごみ、煙草の吸い殻が散乱し、時には民家の塀にスプレーの落書きもあった。子供会やＰＴＡの会議でも問題になったと聞いたことがある。よりよい学習環境のためにと活動を始めたのがあしながおじさんで、学校も連携し『ＳＤＧｓに取り組もう。』ができたという訳だ。清掃後に中学校の校庭で聞く校長先生の話「自分の身の回りの環境を整えよう。そうでないと都市の、まして地球の環境問題には取り組めません。」にも合点がいった。

ところで、朝の小学校の正門ではいろいろなことが繰り広げられる。なんとか涙をこらえていた一年生が、とうとうしゃがみこんで泣いてしまい、高学年の男子は喧嘩を始め、門の脇では女子グループが宿題のノートを広げだす。あしながおじさんは「おはよう」の間に、一年生の手を引いて教室まで行ったり喧嘩をとめたりと忙しい。グループの一人があしながおじさんに助けを求めた。「ＳＤＧｓを自分に引きつけて書けって何⁉私の担当は『目標11、住み続けられるまちづくりを』だって。東京都民ですけどーどうやって私に引き付けるの、東京広すぎでしょ。」するとあしながおじさんは「住み続けられるためには安全で安心でないとね。安全で安心なまちの条件はクリーンなまちであることだよね。ごみ一つにも注意を払って一人一人が環境に与える影響を減らそうって考えればいいんじゃないかな。」

私は小六の夏に転校し、地域清掃の参加はその年が最後となった。清掃の後、あしながおじさんの話を聞く機会があり何人かが質問した。「環境問題は解決できるでしょうか。」「持続可能って例えば何が続けばいいの？」あしながおじさんの答えはこうだ。「環境問題は人が起こしたものでしょ、それならそれを何とかできるのも人なんじゃないかな。」「持続…ね、明日もあさってもこうして学校に通えることかな。世界中の君達くらいの子供みんなが、ね。」

あれから三年たち、私のＳＤＧｓに対する理解も進んだが、地球をどうしようとか大それたことはわからない。でも、自分の回りからクリーンにする試みはその範囲を広げつつ続いている。机の周り半径五十センチが百センチに、そして教室全体、学校の周りまで…と。自分にも確実にできるクリーン作戦を私はこれからも続けていくつもりだ。この小さなアクションが、「五十年後、百年後も豊かで、持続可能な都市『東京』」の実現に繋がると信じて。

今朝は空き缶を一つだけ拾った。地面には朝日に照らされて私の影が長く伸びていた。

入選

持続可能な未来への小さな一歩

渋谷区立原宿外苑中学校　一年　目黒　龍一郎

最近、大型の木造建築を東京都内に建てる予定だというニュースを立て続けに見た。僕は、なぜ今木造の建物を増やすのか疑問に思った。なぜなら、大量の木材を使うことで森林の木を減らしてしまい、環境破壊にもつながるのではないかと真っ先に思ったからだ。そこで、僕は日本の森林や環境問題について調べてみた。

その結果、実は木造の建物を増やした方が、持続可能な未来をつくるために大切であることが分かった。キーワードは『森の循環』だ。産業革命以来、日本でも鉄筋コンクリートで建物を建てるようになり、木材の需要が減っていった。それにより、森林の木は高樹齢化したそうだ。林野庁の資料によると、人工林の半分以上がすでに樹齢五十年を超え、森は老朽化する一方だという。また、高樹齢の木は二酸化炭素を吸収する量が少ない。吸収量が少ないと温室効果ガスが減らず地球温暖化が抑制されない。さらに、大きくなった木は、加工や輸送にコストがかかるので、放置されることが多い。すると、新しい木が生まれ育つための土地が確保できずますます森林が老朽化するという悪循環が生まれてしまうのである。つまり、森林伐採は環境破壊ではないかという僕の発想は間違っていて、その悪循環を止めるには、木を適齢期で伐採し、木材として利用することが重要なのだ。そして、新たに植林し、育て、伐採して利用することこそが、持続可能な未来へ向けた取り組みの一つである『森の循環』の促進だったのだ。

一方で、僕たちが住んでいる東京都の環境に目を向けてみると、危機的な状況にあることが分かった。東京には、鉄筋コンクリートの高層ビルやマンションが並び、夜は眩しいくらいにネオンや大型ビジョンの広告が辺りを照らす。一度、NASAが公開した夜の衛星写真を見たことがあるが、東京は他の都市と比べ圧倒的に光っていて、印象に残った。そんな東京の電気消費量はすさまじい。現在日本は、二酸化炭素を多く排出する火力発電に八割以上も頼っている。国別温室効果ガス排出量で日本は世界第五位であり、それは深刻な気候変動に影響を及ぼす。国連の情報発信によれば、このままだと十年後に地球温暖化の暴走を止められなくなるそうだ。その上、現在東京で一年の内十日程度の猛暑日が、二一〇〇年には、五十日近くに増加し、熱中症リスクも十三・五倍に上昇してしまうとのことである。僕は調べていくほどに危機感が募り、今すぐ何か行動を起こさねばと思った。

では、一体何ができるのだろうか。今後、建築物は全て木造にし、夜十時から照明は消して節電をする。いや、それは現実的ではないし、ガソリンで走る自動車を一斉に電気自動車に変えられないように難しいだろう。

そこで、僕は二つの行動を起こしたいと考えた。一つ目は、現状を知ることだ。刻一刻と変化していく環境に対応していくには、状況を把握する必要がある。そのために、常にアンテナを張って情報収集したり、周囲の人たちに伝えたりしていきたい。その上で、一人一人がすべきことを考察していくことが重要だと思う。二つ目は、食べられる植物を育てることだ。実際に僕の通う中学校では、校長先生と枝豆を育てて味噌を作るプロジェクトがある。自分たちで育てると、買ってきたものよりも愛情が湧き、食品ロスの削減にもつながる。食品ロスも、地球温暖化の大きな要因なのだ。ささやかな行動ではあるが、これを東京中の学校や家庭で行ったとしたら、環境改善への大きなうねりを生めるのではないだろうか。中学生の僕らが今すぐに起こせる行動は、小さな一歩でしかない。しかし、これからの未来を担うのは僕らだ。この小さな一歩が十歩になり、百歩になり、やがて、持続可能な未来に近づいていけるよう、ひたむきに歩みを進めていきたい。

入選

地産地消で東京を守ろう

日野市立日野第二中学校　一年　渡辺　愛友子

市内を流れる浅川付近は、豊かな自然に恵まれています。春には堤防沿いの桜が美しく咲き、夏には川原に緑の草が生いしげり、子供達が水辺で遊ぶ姿も見られます。秋にはふれあい橋から見事な富士山が望めます。そんな浅川沿いに、とても素敵な農園があります。その農園では、あるご夫婦が、無農薬で美味しい野菜を育てています。畑の前には直売所があって、真っ赤なトマトやみずみずしいキュウリ、ナス、春菊、ブロッコリーなどが売られています。他にも、スーパーではあまり見られないルッコラ、フェンネルなどのハーブや、イタリア野菜まで並んでいます。その農園の野菜はとても美味しくて、私は母と一緒によく買いに行きます。季節ごとの色々な美味しい野菜を味わうのが、我が家の定番です。

私が住む日野市は、多くの人が思い浮かべる「東京」のイメージとは違い、農業が盛んです。私は一学期の総合学習のテーマを「日野市の農業」にし、日野市内の農業従事者数や市内でよく栽培されている野菜、果物を調べてみました。二〇二〇年の統計では、市内には二二一人の農業従事者がいて、トマト・大根などの野菜や、いも類、梨・ブルーベリー・ブドウなどの果物を育てています。また、鶏や乳牛を飼育している農家もあります。農業産出額は東京都内の市町村で二十位と高くはありませんが、豊富な種類の農産物を生産していることが分かりました。

市内の農協のお店に行くと、「日野産野菜を買いましょう」と書かれています。私の家では、「地産地消」を意識して、日野産野菜を買うことにしています。近くに住む祖父が市民農園で育てた野菜を分けてくれることもあります。「地産地消」には、輸送費があまりかからずコストが安く済むこと、トラックでの輸送距離が短くなって二酸化炭素の排出量が減り、地球温暖化防止につながること、地域経済を活性化できることなどの利点があるそうです。そして何より、野菜や果物が新鮮で美味しいです。私は東京の都心部の人達にも日野産の野菜を知ってほしいし、一度食べてもらえたら、きっと好きになってもらえると思います。

今、地球規模で環境破壊や、自然災害を引き起こす気候変動が問題になっています。日野市の農業について調べて、私は東京都民が地産地消を意識して、東京産の野菜を食べることが大切だと思いました。そうすることによって、東京に農地が増え、豊かな緑が守られます。東京の野菜が売れれば、農業を魅力的に思う若者も増えて、東京の農業従事者ももっと増えるかもしれません。そうなれば東京の経済がさらに発展します。私は社会の授業で、日本の食料自給率が四十パーセントにも満たないことを学習しました。これではとても、持続可能な社会とはいえません。私は野菜が好きなので、ベランダで自分でも野菜を育てています。そして農業にも少し興味があります。以前クラスで将来の夢を発表したとき、「農家になりたい」と言っている人は一人もいませんでした。気持ちは分からないでもありません。きつそうな上に、収入も少なそうだからです。しかし、もしも東京の農業がもっと活性化して仕事が今ほど大変でなくなり、収入も増えれば、農業はもっと人気の職業になるかもしれません。

五十年、百年、その先も豊かさにあふれる持続可能な都市「東京」にするために私が必要だと思うのは、私達一人一人が自分達の食べるものについて真剣に考え、農業に関わり、農地と緑を守っていくことだと思います。私が大人になっても東京が豊かな都市であるように、そして魅力あるふるさとであり続けてくれるように願っています。